普 通 作 物

水　稲

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
黄化萎縮病	1. 常発地では次のことに留意する。 (1)1株の植付本数を多くする。 (2)本田初期に浸冠水しないよう排水路を整備する。 (3) 水苗代は箱育苗又は畑苗代とする。	1. 本病罹病株はいもち病が発生しやすいので注意する。
萎 縮 病	1. 本病はウイルス病であり、媒介虫であるツマグロヨコバイを育苗箱施用及び本田散布により防除する。	1. 田植前の薬剤散布は地域的に集団で行い、同一集団内の田植期はできるだけ揃える。また散布前にレンゲや雑草を刈取り・耕起し密度を抑える。
縞葉枯病 黒すじ萎縮病	1. 本病はウイルス病であり、媒介虫であるヒメトビウンカを育苗箱施用及び本田散布により防除する。 2. 縞葉枯病については、抵抗性品種の作付けを行う。	1. 早植(5月下旬植)すると発病が多くなるので注意する。 2. 抵抗性品種についても、ウイルス濃度が高まると感受性品種と同様に発病するので注意する。

小　麦(麦類)

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
種子伝染性病害(なまぐさ 黒穂病、裸黒穂病、から黒穂病)	1. 種子を次のいずれかの方法で消毒する。 (1)冷水温湯浸法 1)冷水予浸:乾燥種子を冷水に浸す。水温と浸漬時間は10℃10時間か24℃2.5時間とする。 2)温水浸漬:冷水予浸を済ませた種子は水をよくきり、50℃の温湯に1分間浸して温め、引きあげた後直ちに次の消毒浸漬を行う 。 3)消毒浸漬:52℃の温湯に5分間正確に浸漬して消毒する。 4)冷水冷却:消毒浸漬の終わった種子は直ちに冷水に浸し、水中で種子をよくかきまわして早く冷す。 (2)風呂湯浸漬法 1)46℃に調節した風呂に約10時間浸漬する。 2. なまぐさ黒穂病、から黒穂病は種子伝染の他に土壌伝染もするので、発病ほ場では連作を避ける。 3. 麦類のなまぐさ黒穂病及び裸黒穂病には登録剤がある。	○冷水温湯浸法実施上の注意事項 1. 特に消毒浸漬を行う時の温度と時間を厳守する。 2. 温水浸漬、消毒浸漬および冷水冷却を行う時は種子をかきまわして内部まで速やかに所定の温度となるようにする。このため種子の容器は十分余裕のある方が良い。 3. 消毒した種子は引き続いて芽出しを行ってからは種するが、止むを得ずすぐには種できない場合はかげ干しにより乾燥しておく。 ○風呂湯浸漬実施上の注意事項 1. 浸漬時間中は毎時1～2℃温度が下がるようにフタを少し開けるなどして湯温を調節する。 2. 袋に入れて消毒する場合は、浸漬後数回袋を動かして、内部まで所定温度となるようにする。 3. 冷水温湯浸法の注意事項の3と同じ。

だいず(豆類(種実))

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
ウイルス病	1. 種子は無病株から採取し、褐斑粒を除いて使用する。 2. アブラムシ類を防除する。	1. 種子及びアブラムシ類によって伝染する。

あずき(豆類(種実))

病害虫	防 除 方 法	防除上の注意事項
ウイルス病	1. 健全な株から採種する。 2. アブラムシ類を防除する。	

えんどうまめ（豆類（種実））

病害虫	防　除　方　法	防除上の注意事項
白 絹 病	1. 連作を避ける。 2. 石灰を10a当たり100kgぐらい施用しpHを中性付近に調整する。	
こうがいかび病	1. 収穫後は被害株を畑に残さないように取り除く。	1. 夏まき栽培で秋期に高温、曇雨天が続くと発生が多い。 2. 本病はこれまでこうがい毛かび病と呼んでいた。
つる枯細菌病	1. 連作を避ける。 2. 種子は無病ほ場から採取したものを使用する。 3. 排水をよくする。	1. 軟弱徒長にならないよう肥培管理に注意する。 2. 風の強いところでは防風ネットなどで風ずれができないようにする。
モザイク病	1. 種子は無病ほ場から採取する。 2. アブラムシ類を防除する。	
エンドウゾウムシ	1. 乾燥種子を65℃で5分又は70℃で1分の温湯浸漬を行う。 2. 種子は晴天時に直射日光で乾かす。	1. 年1回の発生。倉庫の隅や野外で越冬し、開花期にエンドウに飛来する。 2. 産卵は4月下旬～5月下旬に若いサヤの上に行われる。